

## 張愛玲「女を語る [談女人]」<sup>i</sup>

李海・陳曉婧・李鴻・楊金娣・李瑾訳、星野幸代編<sup>ii</sup>

西洋人は陰險刻薄な女を「猫」と称す。最近、もっぱら女を罵っている英文小冊子『猫』を読んだ。その内容は、必ずしも目新しいというわけではない。しかし、女に関する雋語は散見するものの、それを収集するのは頗る容易なことではなく、この本のようにまとめたものはない。ここに一部分を抄訳したら、読者は読んだ後、誰もが何か言いたくなるだろう、怒ったり、笑ったり、爽快に思ったり、「心を落ち着ける論」をものす公平を自任する男もいれば、或いは「少し過激だ」と言ったり、「正しいことは正しいが、少数の女にしか当てはまらない、しかし、どっちみち誤りがあれば改め、そうでなければ更に努力しなければ」などという人もいるだろう。要するに、この題目について何も語るべきことがないという人は見たことがない。私自身も当然例外ではない。まず、原文を見て検討してみるとしよう。

『猫』の作者無名氏は序文の中で、あらかじめ鄭重に述べている。「ここでの話は、決してあなたについて語っているのではない。親愛なる読者よ——もし、あなたが男であれば、必ずしもあなたの妻君、姉妹、娘、祖母或いは義母を対象に語っているのでもない。」

彼は、この本を書いた目的は、女で苦い思いをして憂さ晴らしするためではない、と何度も弁明している。しかし、彼はその後で少しは憂さ晴らしの効用もあることを認め、「奥さんと喧嘩したばかりの男は、寝る前にこの本を読めば、慰めが得られるだろう。」と述べている。

彼は言う。「女の物質面の構造はかなり合理化され、精神面ではやや劣っている。それも想定内のことであって、厳しく要求を出してはいけない。

男にほんとうに情がわいたとき、彼の愛は女の愛よりはるかに偉大である。逆に、女がある人を恨んだ場合、男よりはるかに長続きする。

女と犬の唯一の区別は、犬は女のように甘やかされることはなく、アクセサリーを身につけず、しかも——幸いにも——彼らはしゃべれないということだ。

結局、あらゆる男は金を必ずある女に貢ぐ。

男は最も下等な酒場のホステスといちゃついても身分を失うことがない。——上流の女は遠くから郵便配達員になげキスを送ってもダメ！われわれがこれから推断するに

は、男は女と違って、腰はいくら低くしても、たいしたことはない。なぜなら、彼が立ち直り、腰をぴんと伸ばすのは難しくないからだ。

一般的に言えば、女性の生活は男性の生活のように多くの興奮剤を必要とせず、従って、もしある男が公務の余暇に、少し軌道を逸することをして、彼の疲れ、悩み、未完の壮志を調節することは、許されるべきである。

大多数の女にとって、「愛」の意味はすなわち「愛される」ことである。

男は女を愛することを好む。しかし、ときには愛されることも好む。

もしあなたが、ある女に援助しようと約束したら、その女はどんなこともやってくれる。ただし、もし、あなたがすでに一回彼女を援助していたなら、彼女はすぐにあなたを助けてくれなくなる。故にあなたはいつも違う女を助けるべし。そうなれば、少しは報われ、少し利益が得られる——女の恩返しはただ一種しかない。それは見返りを期待した恩返しである。

男から見れば、その女の衣服は麗しくて目を楽しませることかもしれない。ただし、別の女から見れば、それは「一シリング三ペンスーヤード」のしろものにすぎない。故に美しいとは言えない。

時は金なり。故に女は多くの時間を鏡の前に使うなら、多くのお金を洋品店で使わなければならない。

女をからかわない男は男ではないと、彼女は言う。もし彼女をからかえば、あなたは上品な人ではないと、彼女は言う。

男は彼の勝利を誇る——女は彼女の退避を誇る。しかし、敵方が攻めてくるのは、往々にしてすべて彼女自らが招いたことである。

【李 海】

女は善良な男が好きではないが、自分のことは即効性のある感化院だと思っている。一旦結婚しさえすれば、夫はすぐ聖人になると思い込んでいる。

プロポーズする権利は男にしかない。このような制度が一日でも存在すれば、婚姻は公平な取引にはならない。女はよく「あのとき求婚を受け入れてあげたじゃないの」と言い出して、喧嘩で優位に立つ。それゆえ、女は男の方からプロポーズすべきだということに固執する。

ほとんどの女は「間違っていること」をしなければ、気がすまない。結婚だけでは「間違っている」ことが足りないようである。

女は、今まで受けた教育は意志を強くし外界からの誘惑に抵抗するためにほかならないということを、往々にして忘れてしまう——しかし、彼女たちは一生をかけて、外界からの誘惑を挑発することに精力をそそぐ。

現代の婚姻は一種の保険であり、女に發明された。

もし女が出まかせにでっち上げたストーリーから印税を受け取れば、すべての女は

金持ちになる。

突然女に質問すると、答えとして、一番目はおそらく正史だが、二番目は小説になる。

女はいつも極力夫と論争し、彼を論破しなければ、気がすまない。しかし第三者に対しては、夫の話を至言と見なして、引用する。可哀そうな夫…

女たちは友達になるまで、男たちより時間をかける。彼女たちには秘密が多いから。

女たちは誠に幸運である——外科医は彼女たちの良心を解剖することができない。

自分に対する態度だけ見て、女は男を判断する。女はこう言うのだ。「あの人が犯人だとは信じられないわ。だって彼はいままで一度も私を殺したことがないもの！」

男は誤りを犯すが、女はあらゆる方法を講じて誤りを犯す。

女はあまり未来のことを考えない——同時に過去のことを極力忘れようとする——だから、いったい彼女たちに考えることがあるのか分かったものではない。

女は節約し始めたら、「必要」な費用をいくらでも節約できる。実に恐ろしい！

もしある女から秘密を打ち明けられたら、その秘密を絶対にほかの女に話してはいけない——もう別の女に教えたはずであるから。

女はどんなことをしてもらっても、それを当たり前のことだと受けとめる。どんなことをしてあげても、女は謝意を表さない。どんなに細かいことでも、してあげることを忘れたら女から叱られる。……家庭は慈善団体ではない。

たいていの女は考えずにしゃべる。男はしばらく考えて——しゃべらない。

もし女が「もうプロットが分かっている」から同じ本を二度読んだことがないと言ったら、このような女は絶対にいい妻になれない。目新しいものばかり欲しがりセンスと趣などは全く眼中にない女は、ちょっと時間が経って、夫の性格、弱みや癖などをはつきり分かってくると、面白くなってつまらなくなって、嫌になって、もう愛さなくなる。

君の女は空中の樓閣を建てる——もしそれが存在しなかったら、それは君のせいだ！

女に「私のせいよ」と言わせるのは、男にすべての早口言葉を言わせるより難しい。

妻を疑えば、妻は君を騙す。妻を疑わなければ、妻は君を疑う。」 【陳 曉婧】

およそ「女はなんだかんだ」という話は、ただの冗談である。諧謔だけを狙っているので、意味上の正確さはどうしても割り引かなくてはならない。なぜならば、人により気性も異なるから、一概に論じられるわけではないだろう。しかし、比較的にな女については一概に論じることができる。風俗、習慣、職業、環境などそれぞれ違うと言っても、女はほとんど家で家計を切り盛りしたり、子供の面倒を見たりして、伝統的な生活様式はこれしかないの、個人的な習性が違ってても限りがあるからである。それ故、「男はなんだかんだ」を言うより、ざっくりと「女はなんだかんだ」と言うほうが確からしい。

うちの学校で非公式的な弁論大会が行われたことがある。いったん男女問題に及ぶと、皆がもともとのテーマを忘れ、この点だけに集中し、あれこれと取り沙汰し始め、非常

に盛り上がった。その時、ある女性が「老新党」といった口ぶりで男がいかに不公平であり、いかに女——このか弱い、感情の豊かな動物を虐げ、彼女の気持ちを利用して束縛し、慰みものになるよう脅かすか、生存競争における女の劣勢は機会が不均等であるためだと滔々と語った、……男女論戦の際、女はいつもこの常套手段を使う。あの時、彼女に反論せずにはいられなかったのは、私がわざわざ攻撃的な文章を書くのが好きだからではなく、そうした常套句に飽き飽きしていたからだ。1930年頃、女子生徒の間に人気だった『玲瓏』雑誌は映画スターの美容の秘訣を伝えながら、「美」しい「容」貌となった女は男の攻勢をどうしっかり防ぐべきかということも教えてくれた。男というものはすべて「下心がある」からだ。もちろん恋愛は危ない、しかしたとえ結婚しても危険を免れない、婚姻は恋愛の墓場だからだ。

女のこのような話に聞きなれている一方、男の文句も聞き飽きている。民族存続のため、書き尽くせないほど極悪で許せない女でも罵ることしかできず、皆殺しにするわけにもいかない。

双方とも互いに譲らず自分の意見を主張するが、見たところ男は男の、女は女の道理を持っているようである。確かに、女はわがままで、ひねくれていて、うそつきであり、目先のことばかり求め、女狐だ（まじめな女はヴァンプを非常に憎んでいるが、実は誰でも妖婦に扮するチャンスさえあれば、やってみたくてうずうずしている）。賢い女はこれらの批判に反駁しないが、根本に立ち返って男のせいにする。上代、女は体が弱いため、男の拳に屈し、数千年に渡ってずっと支配された。そして環境適応に従って、いわゆる婦道を養ってきた。女の劣性は男のせいなのに、男は何で文句を言うことがあろうか、と。

女の短所はすべて環境のためであるが、男と同等の高等教育を受けた近代的な女がなぜ祖母の世代と同様に疑心を抱いたり、拗ねたりして、がっかりさせるのだろうか。もちろん、数千年の習慣は一朝一夕で改まることではない。猶予さえあれば……

しかし、すべては男のせいというのは徹底的な答えではない。やはり無責任であるような気がする。男はよく「無責任」という形容詞を女に押し付ける。『猫』の作者は次のように述べた。

「なぜ女に重きを置いてはいけないかについて、ある声望の高い教授がかつてたくさんの理由を教えてくれた。実は、この問題にずっと悩まされている。なぜならば、女性たちはいつも自分を重んじ、甘いとか無責任とか思われることを最も嫌うからだ。もしこの先生の言うように、彼女たちを重んじすぎではならないが、彼女たち自身が「甘くて無責任なもの」に甘んじないとすれば、いったいどうすればいいだろう。

彼女たちは重視されてほしいが、ひどいことをしてしまった場合、「彼女たちに責任をとれというのは無理ですよ」と言ってほしいのだ。

そもそも女が征服されて家父長制社会の奴隷になったのは、男より体力的に弱いからであるが、男は体力が猛獣に劣っても、生存競争において獣に屈服されたことがないのはなぜだろう。このことからみると、ひとを咎めるばかりではいけないことが分かる。

【楊 金娣】

有名な小説家オルダス・ハクスリーは、その著書『恋愛対位法』<sup>iii</sup>の中で、「どのような人であるかによって、その人相応の出来事に出逢う」と述べたことがある。『恋愛対位法』には、人を苛立たせ、生まれつき可哀そうな若い女マージョリーのことが描かれている。夫は本来大人しくて素直な人物であるが、ついに彼女のことを裏切って、娼婦と懇ろになってしまう。マージョリーも嘆き悲しむことになる。

無論、社会の発展は不思議なほど盛んであり、個人に抑えられるものではないし、先頭を切って走っている人には訳も分からないだろう。しかしある段階まで遡ってみたら、積極的な要素が多少入っていることも避けられないものだ。

現在の世界の大局が示しているように、人間は競争が激しい機械化商業文明まで進化してきて、戦争しなければならない情勢をもたらした。「争わないで、争ってはいけない」と泣き叫びながら駆けずり回っているとしても、恐れ惑いながらつぎつぎと巻き込まれてしまった。確かに仕方がないが、人間自身のせいではないのも言えないだろう。

男が世界を治めると、めっちゃくちゃになってしまうから、女に位を譲ったほうがきっと目新しく感じられるだろうと、アピールしている人がいる。この話をざっと聞いたところ、病気がひどくなった際、手当たり次第にお医者さんに診てもらうこととすごく似ている。君主政治だとすれば、武則天は名君だし、唐の太宗も名君であろう。わずかな英明な皇帝を擁したら、男女関わらず、天下太平である。

君主政治の欠点は良い皇帝がなかなか得がたいという点にある。民主政治の場合だと、ほとんどの女は男より自制力が遥かに弱い。しかも国際間のいさかいは、そもそも下女同士の喧嘩みたいなのに、さらに本物の女を出陣させると、想像するだに恐ろしい事態になるであろう。

女に国を治めさせることは、「戯を做すに、菩薩を請ふ〔物語の筋がうまく進められない場合に、菩薩を登場させいささか自分を慰める〕」ことでしかないが、この荒唐無稽な提案にさえそれなりの科学的な根拠がある。

今回の世界大戦がわれわれの文明を復元できないほど破壊したら、次期の新たな文化は黒色人種に任せるしかないと、予言した人がいる。なぜかという、黄白人種はもうすでにそれぞれの功績を立ててしまったが、黒色人種だけが原石であり、精力も無駄に使わなかったの、恐らく未来の大時代において、彼等が主役を演じるだろうというのだ。このような話をするのは、決してわざと人を驚かせる説を唱えるためではない。高度の文明、高度の訓練とストレスは、確かに気力を非常に損なう。女は野蛮かつ原始

的ものだとしばしば責められる。人類は鳥類と獣類を手なずけたが、徹底的に女を手なずけることだけはできていない。数千年以来、女はずっと教化外におり、彼女たちはそこに元気を貯え、偉業の策をじっくり練っていないと言えるだろうか。

女権社会には一つの長所がある——女は男より配偶者を選ぶ常識に富んでいる。これは何の奥深い学問でもないが、人類の前途と深く関わっている。男は妻を選ぶ場合、外見だけで判断する。優生学からすれば、顔かたちと体型は重んじられなければならない、女は夫を選ぶ場合も、顔かたちに注意を払わないはずがない。ただ、男のように要望が偏っているのではなくて、同時に知恵や健康や言葉遣いや生計を立てる能力などの項にも注意を払い、顔立ちはなんと二の次に置かれている。

現今社会の難点は、すべて男が妻を選ぶのが下手だということにあるそうだ。それ故子供たちのしつけが悪くて、子孫の質もますます悪くなってゆく。これは大袈裟な話であるが、女に婚姻を支配させることしか、一種の超人の民族を生み出す希望がないということ、認めなければならない。

「超人」という用語は、ニーチェに提起されて以来、しばしば引用されている。ニーチェ以前の古代寓話にも同類の理想が発見できる。不思議なことに、我々が想像している超人はいつも男である。なぜならば、おそらく超人の文明は我々の文明より一層先の成果であり、そして我々の文明は男の文明であろうからだ。

もう一つ、超人はまったく理想の結晶であるが、スーパー・ウーマンは現実にあてはまらないものではない。いずれの文化段階においても、女は女である。男がある分野の発展に偏っているが、女は最も普遍的、基本的なものであり、季節の移り変わりや、土地、人の生老病死、飲食繁殖などを代表している。女は人類の宇宙を飛び越える知恵を着実に株に繋ぎ止めている。

【李 鴻】

いま、この場であっても我々は完璧な女を見つけることができる。完璧な男はまさに稀である。なぜならば、我々はどのような男が完璧だと言えるかはまったく分かっていないからである。功利主義者は彼らの理想を持っている、老荘の信者は彼らの理想を持っている、ナチスも彼らの理想を持っている。それぞれが不十分なところを持っているようだ——それは我々が「完璧な男」に対して持つ期待と要望があまりにも大きいからである。

女の活動範囲が限られているので、完璧な女は完璧な男子よりも完璧である。それと同時に、悪女は悪漢より徹底的に悪事を働くのである。それが事実だ。一部の商売人は商業の道徳をまったく顧みないが、私生活では一分のすきもない。逆に、女に責任を果たさずに他の分野ではまじめに責務を果たしている人も結構いる。しかし、あくどい女が悪事を働く際には、隙さえあればどこでも付け込む。

超人は男性の、神は女性の要素を持っているため、超人は神とは違う。超人は前進的



で、一種の生存目的である。神は普遍的な共感、慈悲、理解、安息である。私も大部分のいわゆるインテリのように宗教を信じようと思っても信じられない。もし私に信仰を得る日が訪れたら、恐らく信じるのはオニール<sup>iv</sup>の『偉大なる神ブラウン』<sup>v</sup>の中の地母神である。

『偉大なる神ブラウン』は私が知る限りでは最も人を感動させる劇である。読んで読み直し、読むのが三回目、四回目になっても悲しみがこみ上げ、涙がこぼれてくる。オニールが印象派の筆法で描いた「地母」は一人の娼婦である。「強く、静かな、肉感的な、金髪の女、二十歳ぐらい、皮膚は生き生きと清潔で健康的、胸は豊かで、尻は大きい。彼女の動作はのろくて、落ち着いていて、気だるそうでまるで獣のようである。その大きな目は夢を見ているかのように、深くて本能的な動きを反映している。彼女はガムを噛み、神聖なる牛の如く、時間を忘れ去り、それ自身の永遠不滅な目的を持っている。」<sup>vi</sup>

彼女が話すときの口ぶりは下品だが、情熱的で誠意がある。「あたしはお前らが見ていられない、お前らのすべて、すべてのくそつたれ——あたしは裸で町に飛び出し、大勢のお前らを愛し、死ぬほど愛し、お前らに一種の新しい麻醉薬を持ってきたかのように、永遠にあらゆることを忘れさせてやりたい気分だ。（歪んだ微笑みを見せて）だけど、やつらにはあたしの姿なんか見えない、やつらが互いに姿が見えないのと同じように。そのうえ、あたしの助けがなくとも、やつらは続々と前へ進み、続々と死んでいくのさ。」<sup>vii</sup>

人が死んで土に埋める。地母神は「お前が眠りについたら、あたしが代わりに布団をかけてやるよ」<sup>viii</sup>と、死に際の者を慰める。

人間として世に生きるには、どうしても一つぐらい仮面をかぶらねばならない。彼女は死に際の者の代わりに仮面を取り外し、「お前はこれをつけて床に入ってはいけないよ。寝るなら一人で行かなきゃならない。」<sup>ix</sup>と言うのだ。

ここに、台詞を抄訳しておく。

ブラウン （しっかりと彼女の体に寄りかかり、感謝の気持ちが溢れる）土は暖かい。

地 母 （安らかに、まっすぐな視線は偶像の如く）しーっ、（彼に声を出さないように）寝なさい。

ブラウン 分かりました、母上。……私が目を覚ましたときは……？

地 母 太陽がまた昇ってくるよ。

ブラウン 生きている人と死んでいる人を裁くために！（恐怖）私は公平な裁判など要らない。私は愛がほしい。

地 母 愛しかない。

ブラウン ありがとう、母上。<sup>x</sup>

彼が死ぬと、地母は自問する。

「子を産んで何になる？何になる？死を産み出すため？」<sup>xi</sup>

彼女はさらに言う。

春はいつも戻ってくる、命を連れて！また戻ってくる！いつも、いつも、永遠にまたやってくる！——また春になる！——また命が誕生する！——夏、秋、死亡、また平和になる！（痛切な憂患）しかしいつも、いつも、いつも恋愛と受胎と生産の苦痛だ——春はまた耐え忍べない命のさかずきを掲げ（痛切な喜びに変わる）、その栄光に燃えあがる命の王冠をかぶって！（彼女は立ちつくし、大地の偶像の如き、広々とした果てしない世をじっと見つめる。）<sup>xii</sup>

これこそが女神である。「驚き慌てる白鳥の如き、優雅に泳ぐ龍のような」<sup>xiii</sup> 洛神は一人の古風な美女にすぎず、世の中に崇めている観音様は一人の古風な美女の裸足姿にすぎず、半裸で巨大なふくよかなギリシア石像は一人の女性アスリートにすぎず、金髪の聖母は一人の美しい乳母にすぎず、公衆の面前で千年あまりも乳を飲ませていただけである。このまま続けたら、宗教論争の危険な渦に巻き込まれ、男女の論争と同様に激しいものになりそうだが、それに比べて面白みがない。やはりここでやめよう。

たとえ女にさまざまな過ちがあっても、その精神の裏側には「地母」の萌芽が少しある。かわいい女は確かに実にかわいい。ある種の範囲内では、かわいい人柄と艶やかな<sup>あで</sup>な姿は人工的に作り上げることができる。世界各国の様々な淑女教育はすべてそれを目標にしているが、本来の意図を歪められ、『猫』の本の中のような奥様やお嬢様を作ってしまうこともたびたびあるが、それでも容認してもよい。

女は人を喜ばせる方法をいろいろ持っている。彼女の体しか目に入らない人は、多くの貴重な生活の情趣を失ってしまう。

美しい身体で人を喜ばせるのは世界で最も古い職業であり、極めて普遍的な婦人の職業でもあり、生計を立てるために結婚する女はすべてこれに属する。これは明言を避けなくてもいい——美しい体を持っていて、その体で人を喜ばせるのも、美しい思想を持っていて、その思想で人を喜ばせるのも、実際のところ、そう大して違いはなかるう。

【李 瑾】

---

<sup>i</sup> 張愛玲（1920-1995）は中国 1940 年代を代表する作家の一人。「談女人」は初出『天地』第 6 期



(1944 年)、底本は『張愛玲典藏全集 8』皇冠文化出版有限公司 2001、101-111 頁による。

<sup>ii</sup> 共訳者の 2013 年度の所属 (学年) は次の通り。李海：香港衛星テレビ国際メディア集団。陳曉婧：名古屋大学国際言語文化研究科多元文化専攻 M2。李鴻：名古屋大学国際言語文化研究科日本文化専攻 M2。楊金娣：名古屋大学国際言語文化研究科多元文化専攻 M2。李瑾：中京学院大学専任講師。それぞれ翻訳担当部分の末尾に名前を記し、全体の語句調整を星野が担当した。

<sup>iii</sup> *Point Counter Point* (1928) イギリスの小説家 A.L. ハクスリーの小説。1928 年刊。1920 年代のイギリス上流社会が舞台。作者の自画像といわれる傍観者的で懐疑的な作家、キリスト教倫理や現代の科学主義に反対して原始の人間性の回復を説く画家、冷笑的なニヒリスト、精神主義を説きながら実際は好色漢の作家、ファシスト、共産主義者、有閑夫人、刹那的なフラッパーなど、第 1 次大戦後の価値観の混乱のなかにうごめく知識人たちの生き方と思想を描いた思想・風俗小説。

<sup>iv</sup> Eugene Gladstone O'Neill (1888~1953)、アメリカの劇作家。ノーベル賞をはじめ、ピューリッツァー賞などを受賞し、アメリカの初の世界的劇作家やアメリカの近代演劇を築いた劇作家として知られる。彼はカトリック信仰のアイランド系の家庭に生まれ、カトリックの寄宿学校にも通っていたが、やがて信仰を捨てて生涯回心することはなかった。

<sup>v</sup> 原文名は *The Great God Brown* で、1926 年に初演。ダイオン・アントニーとビリー・ブラウンは幼馴染の友人である。純朴で臆病なダイオンは常に情熱的で皮肉屋の仮面をつけている。二人はともに建築家になる夢を見ながら、マーガレットという女性を慕っていた。マーガレットはダイオンに心を寄せるが、仮面をつけているときの彼しか愛せない。やがて 2 人は結婚するが、全財産を使い果たしても、ダイオンは建築家にはなれなかった。苦しい生活のなか、彼の仮面は皮肉屋で絶望的になるが、マーガレットの愛は変わらなかった。しかし、ダイオンは酒におぼれ、娼婦シベルのもとへ通うようになった。そこでは仮面を外し、素顔で過ごしている。そのとき、建築家として成功したブラウンが現れる。生活のために、マーガレットの計らいで、ダイオンはブラウンの設計事務所で働くようになり、その才能を発揮するようになるが、心の苦悩や葛藤に苦しめられ、ブラウンに仮面を託し、死を選んでしまう。ダイオンの死を隠すために、ブラウンは自らの健全な成功者の仮面とダイオンの仮面とを使い、一人で二役を演じるようになる。長年秘かに慕っていたマーガレットと暮らしているうちに、ダイオンの仮面をつけている自分ではなく、本当の自分を愛してほしいと欲張ってしまう。しかし、マーガレットのダイオンの仮面に対する執着に深く傷つけられ、死ぬことを決心する。最後、ブラウンは慈悲深いシベルのもとで死んでいくことになった。それはシベルだけが彼とダイオンの素顔を受け入れ、人間として理解してくれたからである。

<sup>vi</sup> *The Great God Brown* の第三幕の冒頭ト書きからの引用。“Eugene O'Neill complete plays 1920-1931” *The Library of America*, p.492, 1988.

<sup>vii</sup> 前掲 *The Great God Brown*, p.499.

<sup>viii</sup> 参照した原文にはこのセリフがない。

<sup>ix</sup> 参照した原文にはこのセリフがない。

<sup>x</sup> 前掲 *The Great God Brown*, p.532.

<sup>xi</sup> 参照した原文にはこのセリフがない。

<sup>xii</sup> 前掲 *The Great God Brown*, p.532.

<sup>xiii</sup> 「洛神の賦」の一節。作者の曹植 (192-232) は曹操の三男で、李白・杜甫以前における中国を代表する詩人である。「洛神の賦」は曹植の最高傑作ともいわれる作品で、洛神と呼ばれる洛水 (洛陽の南を流れる川) の女神のモデルとなったのは兄嫁の甄氏という説もある。